

# ロウソク以後の労働運動

## 経済主義を越えて社会連帯に

チャン・ソクジュン

(「正義党」附設 未来政治センター副所長)

ついにロウソク市民が勝利した。朴<sup>パククネ</sup>権恵を権力の座から追い出し、財閥改革も李<sup>イジエヨン</sup>在鎔の拘束で最初の穴を開けた。しかし我々が倒さなければならないものは朴権恵政権と財閥体制だけではない。バリケードの内側にある偶像も打倒しなければならない。進歩勢力と社会運動が、ロウソク革命を共にした新しい世代の要求に応えようとするれば、『1987年イデオロギー』から自由にならなければならない。

では『1987年イデオロギー』とはなにか？ 色々な要素はあるが、その中でも『経済主義』を強調したい。経済主義とはなにか？ 経済的な利益の追求を他のどんな価値よりも優位に置く態度である。そして他の価値すら、経済的合理性の枠を通してしか見ようとしない態度である。資本主義の社会では経済主義は余りも当然な前提であるため、特別に『イデオロギー』としては迫ってこない。だから、最も強力なイデオロギーである。

主流経済学は、すべての人間は経済主義に従って行動するということを前提にする。そして、我々は日常、大体そのように行動する。ただ過去の歴史との対照を通してのみ、これが我々の時代にだけの特徴であることを見抜くことができる。資本主義の胎動期には、資本は集団の独特な思考と行動様式だったものが、今は、地球の資本主義の中で生きているほとんどすべての大衆の文化になった。

### 韓国的経済主義— 『追撃』意識

経済主義は韓国だけに格別な現象ではない。資本主義の普遍的な現象である。しかし経済主義が韓国社会に唯一の強い力を発揮するには歴史的な流れがある。韓国社会に根を下ろした経済主義の独特の形が存在し、それが特に支配力を行使する領域が別にある。謂わば、『韓国的』経済主義がある。

韓国的経済主義の発端は朴<sup>パクチヨンヒ</sup>正熙政権以来の圧縮成長である。この時期に、国家権力は市

民に、知的、道徳的な師匠として君臨した。単純に軍靴で踏みつけただけではない。生き方の模範まで教えようとした。国が『良い生き方』とはなにかを規定し、その実践指針まで几帳面に教示した。毎朝、TVからは朴正熙が作詞・作曲したという『セマウルの歌』が鳴り響いた。「良い暮らしをしよう」というスローガンを繰り返す。

国が示す「良く生きる」こと、「良い暮らし」というのは何だろう？ セマウル運動が盛んだった1970年代には、取り敢えず「藁葺きの家をなくし、村の道を広く」ということだった。1980年代になると、藁葺きの家をなくした跡にマンション団地が建ち、広がった道は自家用の自動車でぎっしりと埋まった。これはいわゆる先進国の漠然としたイメージだった。政府の宣伝と企業の広告、主流媒体のプリズムを通して大衆の目に映った先進国、主としてアメリカのイメージだった。

圧縮成長の指揮者である国家権力は、先進国を『追撃』しなければならないと大声を張り上げた。軽工業で追いつき、重化学工業で追いつき、情報化で追いつき、そうすれば我々も先進国になるということだ。もちろん、追撃は地球の資本主義が登場した以後、絶えず後発資本主義国の生存・発展戦略だった。イギリス以外のすべての工業国は、ある程度は追撃の結果としてある。

しかし韓国の追撃には並外れたものがあつた。朴正熙政権は他に例を見ないほどのスピードで先行の工業国に追い付こうとして、社会のあらゆる力量を総動員した。国家機構の指揮を受けて模範投資を始めた財閥も、労働組合も、訳も分からず労働競争に追い立てられた労働者も、故郷を離れてまったく見慣れない都市の貧民街に定着した離農民も、すべてが追撃戦の競技場に立った。歴史上、1930年代のソ連以外には似たような事例を見つけ出すのが難しい程の産業化の総力戦だった。こうして、追撃の世界観が自然に大衆に染み込んだ。

国が示した「良い暮らし」のイメージに追い付くことが、一般的な生活の目標になった。前にいる者たちが手に入れた経済的な成功を、私もやはり、我が家もやはり、手に入れなければならない。後発の財閥は先発の財閥に追い付き、中間層は富裕層に追い付き、貧しい者たちは中間層に追い付こうと必死になった。すなわち、全社会的な追撃戦の様相が現れた。国は先進資本主義を追撃し、市民たちは「良い暮らし」により近いように見える直ぐ上の階層を追撃した。

このような『追撃』によって、この国ではどんな資本主義社会よりも早く深く経済主義が根を下ろした。上層階級を追撃対照と見る限り、階級の間にはハッキリとした線は引けな

い。本来、階級というのは距離を置くことから始まる。労働者が資本家と距離を置くとき、はじめて労働『階級』とすることができる。この距離から、マルクス主義者たちが言う『階級意識』が形成される。資本家集団に親しい経済主義のイデオロギーは、この間隙を飛び越えるのに苦勞する。しきりと経済的な利益ではない、別の価値を問題にする集団的な意地、自負心、気品とぶつかるからである。

しかし追撃状況において、距離というのは縮めなければならないものである。中間層にとって富裕層は未来の自分であり、労働者には中間層がそうである。そうなればなるほど、上層階級の思考と行動様式は簡単に下に拡がっていく。こういったことが、圧縮成長の時期に韓国で起こったことだ。国家機構と資本家集団が率先垂範した経済主義イデオロギーを、我も我もと熱心に真似し、学習した。一日も早く追い付かなければならない「良い暮らし」のイメージと経済的な利益の追求を、徐々に、より一致させるということだ。

## 大衆の経済主義を正当化してくれた 87 年以降の労働運動の経済主義

『87 年イデオロギー』の経済主義は、このような大衆の経済主義そのものではない。これを意味するのなら、『87 年イデオロギー』と言ってはいけない。第一次経済開発 5 カ年計画が始まった年を指して『1962 年イデオロギー』と言ったり、維新独裁の樹立以後の、セマウル運動が騒々しく拡大した年を指して『1973 年イデオロギー』と言わなければならないようにだ。

問題は 1987 年以後の進歩勢力と労働運動の発展にも拘わらず、経済主義が弛緩するどころか、更に拡散し、強化されたという事実である。87 以降の労働運動は、経済主義と対決したり、対案を提示することができなかった。むしろ経済主義が全盛期を続けていけるように新しい通路を造ってやり、自己正当化の論理を提供した。大衆の経済主義を誤認して、これと結託して煽った、労働運動の経済主義が作動した。

冷静に振り返ってみよう。1987 年から今日まで、民主化世代、民主労組の一世代が現実成し遂げたことは何だったか？ 集団的な追撃の成功である。

かつては国家権力が指し示す方向に人それぞれに追撃戦を繰り広げたが、1987 年以降は、追撃でひっくり返された者たちが力を合わせて国家権力と衝突することもあった。しかしこのような衝突によっても進もうとする方向自体は変わってはいなかった。三次好況以後、全盛期を迎えた韓国の資本主義に便乗し、先行する者たちに追い付こうとした。おかげで民主化世代は、国があればほど宣伝した『良い暮らし』のイメージが実際にどんなも

のかを味わうことができ、相当数の組織労働者もこの隊列に合流した。

進歩勢力(私もその一部なので、以下の内容は『自己』批判でもある)は、このような流れにこれといった異議を提起しなかった。いや、これを擁護し、歴史の進歩という意味を付与した。進歩左派は企業別労働組合の賃金引き上げ闘争に『階級闘争』を見た。もちろんこれが「階級闘争ではない」と言うことはできない。しかし、ここにはもっと別の韓国的な流れがあった。資本との熾烈な対立の裏面には、韓国的な経済主義の核心である追撃意識が反復、拡大されていた。進歩左派が階級闘争の前進に心を奪われたその瞬間に、実際に前進していたのは大衆の経済主義であった。

このような誤認と無能の近所には、労働『階級』を巡る至極単純な観念と幻想があった。進歩左派の頭の中には二つの在り方の労働者階級しかいなかった。一つは経済的な被搾取者である現在の労働階級だった。他の一つは、未来にすべての矛盾を解決する主体である革命的な労働者階級だった。そして前者を後者に成長させることが階級闘争だった。進歩勢力はこのような観念に従って、労働組合のすべての闘いを『階級闘争』であると正当化した。この枠では、集団行動の主たる動機が、単なる経済的な利益の追求なのか、或いはこれを超える価値を伴っているかを識別することは、大して重要なことではなかった。

そして、上記の二つの労働階級は、実在というよりも虚構に近い。単純に資本の被雇用者という位置だけでは、労働『階級』と呼ぶのは難しい。未だ社会勢力ではないからだ。また革命の主役としての労働階級は、依然として検証されていない仮説である。現実の労働勢力がそのような存在に近寄った瞬間(仮に100年前のロシアの大都市)はあるにはあったが、今までは『例外的』な瞬間の方により近かった。

労働『階級』という言葉に符合する実態は、むしろこの二つの虚構の間の、なにがしかの存在である。言い方を変えれば、労働階級のもう一つの在り方が存在し、実はこれが『現実』の労働階級である。『経済的』労働階級と『革命的』労働階級の間どこかに存在する『社会的』労働階級がそれである。『社会的』労働階級は、資本主義社会では、自らのイデオロギーを常識と標準として押し付ける支配集団との距離によって識別される。それらは、何時でも支配集団とは区別される信念と情緒、価値を掲げる準備ができていたので、経済主義のイデオロギーに『完全に』包摂されたとは言にくい集団である。

韓国の進歩左派が受け容れたマルクス主義は、このような『社会的』労働階級の存在を前提にする理念・運動だった。このような在り方の労働階級が存在するという前提の下に『階級闘争』を話し、『革命なのか、改革なのか』を論争する思潮だった。1世紀前のヨ

ヨーロッパでは、これは特に問題ではなかった。社会主義の理念・運動が盛んになる頃に、実際にこのような労働階級が形成されていたからである。そして『社会的』労働階級、従って実際の労働『階級』がどのような存在で、どのように形成されたのかを理論化する作業も、遅れてようやく登場した。このような労働階級に解体の危機が迫った頃の話だ。

しかし韓国の進歩左派は、ヨーロッパのマルクス主義者たちには当然視されていたこの現実的な前提が、韓国社会には未だに存在しないという事実をハッキリと認識できなかった。これらは、全世界を驚かせた戦闘的な民主労働組合運動から、マルクス主義的な談論の現実の根拠を求めた。まるで『社会的』労働階級が既に登場したかのように、古典の社会主義の談論を反復した。そして、大企業、公共部門の分派的な経済闘争が、即ち『階級闘争』になった。

これは民主労働組合運動にも決して良いことにはならなかった。1987年労働者大闘争以後、新生の労働組合運動は様々な可能性を同時に抱えていた。集団的な追撃運動に帰結される可能性も色濃くはあったが、資本・国が決して教示することのない社会連帯の種子も持っていた。後者を見つけ出して成長させるのが進歩勢力と労働運動の役割だった。しかしこれらはこのような弁別と発見、養育の労働に失敗した。これがロウソク以後に我々が克服しなければならない『87年イデオロギー』の核心である、進歩・労働運動の経済主義である。

### 新しい全体を提示しなければならないー連帯の社会を！

どのようにすれば進歩・労働運動の経済主義の傾向を克服できるか？ 難しい問題である。回答を見付けようとする模索は既に色々なところで始まっているが、『87年イデオロギー』の慣性がこのような試みを邪魔している。しかし新しい抗争によって1987年抗争以後の一時代が終わりを告げようとする今、これ以上このような慣性をどうしようもない現実として銘記することはできない。そうすれば、既成の労働運動と2017年世代の出会いが永遠に約束することができない。

おそらく出発点の一つは、『階級闘争』という言葉によっていつも想像したところから脱げ出すことである。最もよくあるのは、社会の諸勢力が全体をどのように分けるかを巡って闘ったという観念である。お互いの持ち分があって、その持ち分を分け合おうと闘ったというのだ。もう一つの通念は全体の真の主人を選ぼうと闘ったということだ。奪われた全体を一挙に取り戻そうとするやり方の革命感のことだ。

しかし社会勢力の間の闘いは、今はこれらとは違った観点から理解し、想像しなければならない。誰がより良い全体を提示するのかを巡って争われる闘いから展望しなければならない。これは、より魅力的で人間的な全体を例示する勢力が勝利する闘いである。

全体というのはすなわち『社会』である。そして、富も、権力もない勢力が前に立つ、全体の美徳という『連帯』だけだ。ここに、経済主義の頑丈な慣性から抜け出す糸口を見つけ出すしかない。